

# 着物の様式変遷における明治時代の意味

## —近世から近代への架け橋—

The transition of kimono pattern design from the end of the Edo period to modern times

小島 咲

Saki KOJIMA

### 1. 緒言

明治時代が終わってから 100 年が経過し、服飾史・染織史においても明治時代の着物<sup>1)</sup>は重要な研究対象として捉えられている。しかしながら、これらの領域における先行研究では、この時代を象徴する服飾である洋服との比較対象として取り上げられる他<sup>2)</sup>、着物そのものについての研究では、当時刊行された家庭雑誌や婦人雑誌の記述を抜き出し、当時の現状の一部が語られているに過ぎない<sup>3)</sup>。また、これらの研究は、明治時代というひとつの時代を断片的に捉えたものでしかなく、前後の時代との関係性の中では捉えられていない。

一方で、現存作品を用いた意匠変遷の研究も行われているが<sup>4)</sup>、これらの研究では、先にあげた文献資料を併用しての検証作業は行われていない。

そこで、本研究では当時の雑誌の記述<sup>5)</sup>や刊行年が明らかな着物模様雛形本を頼りとしながら、現存作品との比較作業を行う。具体的には、明治時代における着物の様式変遷をより明確なものにし、明治時代の着物がどのような特徴を持っていたかを明らかにする。

### 2. 明治時代の着物の様式変遷

#### 2.1 前期 (明治初年～20 年代)

はじめに、明治時代前期における着物の詳細を知る十分な一次資料がないことを先に述べておく。先述したように、現在、明治時代の着物の研究には家庭雑誌ないし婦人雑誌が有効な研究資料として用いられている。しかしながら、これらの雑誌類が盛んに刊行されるようになるのは、明治 20 年代後半以降である。それ以前における女性向けの出版物は、江戸時代から盛んに刊行されていた、女性の嗜みやあるべき理想の姿を述べた教訓書類しかなかった。教訓書類は、男性社会であった江戸時代において、いわば男性が求める理想の女性像を描いたものであった<sup>6)</sup>。つまり、明治期においてもこのような書物が刊行されていたことは、明治時代に入っても、社会で求められる女性のあるべき姿は江戸時代のそれと変わらなかったといえる。以下に、江戸時代、及び明治時代初期に刊行された教訓書に記された理想の衣服観を記す。

身の莊りも衣裳の染いろ模様なども、目にたたぬようにすべし。身と衣服との穢れずして潔げなるはよし。勝れて清らを尽くし、人の目に立つほどなる

は悪しし。只わが身に応じたるを用ゆべし<sup>7)</sup>。(享保元(1716)年刊行「女大学寶箱」第十四条)

身の莊りも、父母の許に存りて父母の賜わる程は、売品に花を飾る鄙語の理もあれば、花美なるも苦しからねど、爾りとて時の流行に泥むは、人柄の賤しきもの也。況して人の妻と做りては、衣裳の染色模様なども、他目に立たぬ物を用い、貧富年齢に應ずるを可しとす。…<sup>8)</sup>(明治13(1880)年12月「新撰増補女大学」第十一節)

上記の記述より、江戸時代と明治時代前期における望ましいとされる衣服観は概ね一致しているということがわかる。つまり、華美を良くないとし、模様や染め色が目立たず、おとなしいものを良いとしている。江戸時代前・中期における小袖の流行変遷では、これら教訓書で示される意匠とは全く異なった、派手な地色の大柄な模様が流行していた。しかし、江戸時代後期になると、徐々に教訓書で示される意匠に近づき、理想と現実社会での差が見られなくなるのである。このような流れに加えて、これら教訓書類が明治時代に入っても変わらず刊行され続けたことを加味すると、江戸時代における衣服に対する価値観は存在し続け、現実の社会においても未だ前時代のものをそのまま継承していた可能性が考えられる。

先行研究によれば、明治時代前期に位置づけられる着物は図1に示すような、鼠色の地色に、風景模様を裾にあしらった意匠であるとされている<sup>9)</sup>。このタイプの着物類は、地味な地色に、裾だけに小さく模様が施されており、まさに教訓書で示される条件にふさわしいといえる。そこで、以下では、この意匠形式が明治時代前期に出現した意匠と位置づけて良いかどうかについて、それ以前、および以後の資料より検討を試みる。

明治24(1891)年刊行の『古代模様廣益紋帳大全』に掲載されている着物模様は刊行年がはっきりしている資料の中で、比較的初期のものと思われる。ここに掲載されている図案を見ると、地色は示されていないものの、先行研究において明治時代前期に位置づけられている意匠に類似したタイプのものが見られる(図2)。

次に、江戸時代文政3(1803)年に制作されたと考えられる肉筆の小袖模様雛形本<sup>10)</sup>「新模様雛形」に収録されている図案と比較してみる。肉筆の雛形本に収録される小袖模様の特徴は、それ以前の版本形式の雛形本に多くみられた図案的な模様と比べて、精緻な表現の模様が多くみられる点である(図3)。これらは、またこの時期にこうした模様が流行したからこそ肉筆の雛形本が必要になったことを示している。明治時代前期に位置づけられている着物類の模様も精緻な表現をとることから、肉筆雛形本の時代を経由して登場できた模様であると推測される。

従って、幕末・明治初期を挟んでその前後の時期に位置づけられる前記資料に、幕末・明治初期の着物と類似した意匠や表現が見られることから、先行研究で言われている図1タイプの意匠はこの両者に挟まれる時期に存在していたことが確認できる。

また、『風俗画報』201号(明治32(1899)年12月15日刊行)では、三井呉服店の意匠係、粉山東洲が、明治初年から明治24、25年迄の流行色として以下の色を上げている。

明治初年～廿四五年迄の流行 葡萄鼠、栗鼠、鶯茶、利久茶、藍鼠、深川鼠、

上記の地色は、栗鼠を除いて、江戸時代文化年間(1804～1814)頃に刊行されたとされる、『手鑑模様節用』に全て掲載されている染め色である。本書には、当時の小袖の模様や染色、着装に関する心得事等が記載されており、実用

書の役割をもった出版物である。この他、染屋で受注に用いられたと考えられている江戸時代後期の色見本帳にも前記の色名が見られる。これらのことから、明治時代前期における流行色は既に江戸時代後期に登場していた色であり、新たに作り出された色ではないことがわかる。化学染料が日本に伝えられたのは明治8(1875)年とされるが、明治時代前期においてはまだ使える人が限られていたり、技術的な問題から、広く普及するには至っていなかったといえる。

また、図4に示したタイプの意匠は、先行研究によって同じ明治時代前期に位置づけられている意匠である<sup>11)</sup>。図1と類似した意匠であるが、図1が無地染であるのに対し、図4は小紋染が施されている。小紋も江戸時代後期に縞や格子とともに流行したものである。江戸時代後期から、縞帳、小紋帳というような見本帳が多数現存していることから、明治時代になって、小紋染と裾模様を取り合わせた、この意匠形式が生まれたのは自然の流れであると考えられる。なお、この意匠形式については、明治16、17年頃、花柳界で流行し、一般に広まったと言われている<sup>12)</sup>。

以上、先行研究によって明治時代前期に位置づけられている着物類は模様、地色の点において、江戸時代後期の様相を引き継いだものであったといえる。加えて、その流れは明治20年代まで引き継がれていたことが明らかとなった。つまり、明治時代前期の着物は、未だ江戸時代からの流れを汲み、江戸時代の感覚や価値観で制作されていたことが明らかとなった。なお、図1の形式ながら模様の一部に化学染料を使用したものも見られるが、これは明治8(1875)年以降に制作されたと考えられる。

## 2.2 後期(明治30～40年代)

明治30年代に入ると、着物模様雛形本の刊行や、衣服についての記事を掲載している家庭雑誌、婦人雑誌の刊行が急激に増加する。

『風俗画報』においても、第49号(明治26

(1893)年1月10日刊行)の「流行品」という項目において「扱風俗畫報に本年より毎號流行品を掲げ讀者諸君をして商事にハ利を他人に制せられざらしめ交際にハ差を人に取らざらしめんとを務めんとす」(下線部筆者)と記され、流行品に関する記事が毎号取り上げられるようになる。はじめのうちは、着物に限らず、様々な流行品が記されているものの、明治30年代に入ると、「新流行の夏衣裳」「新年流行の衣裳」といった記事名がつくようになり、衣服(着物)に関する記事に特化していく。

明治30年代以降の着物意匠に着目すると、色と模様の2点において、その変化を捉えることができる。

まず、色については色の濃淡や明暗を利用した意匠が増えたといえる。一つは明治時代前期に多く見られた裾や袂に風景模様を配した意匠であるが、この意匠は前期に流行した鼠色の地色の代わりに、化学染料を用いた鮮やかな濃い色に置き換えられるようになる(図5、6)。ほとんどが裾のあたりで濃い色から薄い色にぼかし、染め分けたもので、いわゆる「曙染」と呼ばれる意匠である。この染め方は、明治時代前期にも見られるが、鮮やかさの点において、両者は大きく異なる。更に、明治40年代には『風俗画報』第389号(明治41(1908)年10月5日刊行)、及び第392号(明治42(1909)年1月5日刊行)に以下の記事が見られる。

### 「衣服の流行」

地色は昨年まで流行の納戸、鐵納戸、茶、鼠等凡て濃厚な色合のものは<sup>ひるみ</sup>晝見には好いが、兎角燈光の下で引立たぬので、本年は何れも薄色に傾いて来た様である。(『風俗画報』第389号)

### 「最近の流行界」

昨年はオリブや小豆色が需用多かつた爲め、今年の冬季はクリームに淡紅色を折衷した褪緑色が令嬢間に流行して

居る。〔風俗画報〕第 392 号)

これらの記事からは、鮮やかな濃い色に加えて、淡い薄い色も化学染料で染められるようになったこと、そして、地色として濃い色が流行した次の年（あるいは次の季節）は薄い色というように、色相ではなく、色の濃さによって、色の流行が動いていたことがわかる。

また、『風俗画報』第 330 号（明治 38（1905）年 12 月 10 日刊行）には高島屋飯田呉服店で染色懸賞が催された記事が掲載されているなど、新しい色も盛んに求められていたことがわかる。そこには、オリーブ色、カーキ色というような色も賞を取っており、これまで見られなかった色名も登場している。

続いて、模様について見る。明治 30 年代以降、模様は徐々に大きくなる傾向が捉えられる。前期に流行していた風景模様も依然として使われているが、前期のそれに比べると大きく表わされるようになっていく（前掲、図 5）。また、風景模様以外にも江戸時代以前から用いられていた図案も引き続き用いられているが、これらも江戸時代後期から明治時代前期にかけて施された模様が精緻に表わされているのに対し、明治時代後期には一目でそれが何であるかわかる程、大胆に模様が表現されるようになっていく（図 7）。

明治 40 年代に入ると、模様は植物模様がとりわけ多くなったことが、明治 40（1907）年刊の『きぬくらべ』などからわかる。それも着物 1 枚に対し、1 種類の植物模様を取り上げ、写実的に描いた意匠が多く見られるようになる（図 8、9）。また、植物模様の種類も高山模様や洋花模様というような、それまでになかった意匠題材を取り込むようになったことに加え、『風俗画報』においては元禄模様、桃山式模様、芦手模様といった日本の過去に遡った模様も見られた。この他にも、明治 33（1900）年刊の『花のかげ』に見られるように、明治 30 年頃から地色を切り抜くことで、模様を影のように表現

した、新しい模様表現も見られるようになる（図 10、11）。

以上、明治 30 年代からの着物は、明治初年から 20 年代にかけてとらえられた近世からの流れを引き継いだそれまでの意匠変遷が、大きく変わる時代であったと捉えられる。

### 3. 明治時代後期の意匠変遷の変化の背景とその後

明治 30 年代以降に捉えられた意匠変遷の変化の背景には、先に述べたように化学染料の導入、普及が大いに関わっていたことは当然であるが、この他、夜会や園遊会というような、女性が外出する（見られる）機会が増えたこともその背景として考えられる。『風俗画報』第 174 号（明治 31（1898）年 10 月 10 日刊行）「三井呉服店の新意匠」、及び第 201 号（明治 32 年（1899）12 月 15 日刊行）「衣裳の模様」には、以下のような記述が見られる。

#### 「園遊会模様」

従来我國の模様は流麗華美を極め、精好緻密なるを尚び只其の近間に見て美しかるべき模様をのみ撰擇めるもの、如し・・・園遊会（ガーデンパーティー）の如き、互いに遠距離に隔りて逍遙せるの場合に於ては、従来の模様の單に映りよからぬのみかは、摺り寄つてこそ身に相應はしかるべき模様も、遠く隔たりては、殆むと其模様すらも辨せざるに至る、況むや色合の點に於て殊に著るしきを見る。・・・洋装婦人の逍遙さる態、其服裝の如何にもがにも映りよかるに、傍なる和装婦人の、比較的、何となく見榮えなきも、其模様の遠見に適せざればなり、若し此の婦人を數歩以内に認とめたらむには、如何ばかり美しかるべきに。こゝに着目する處ありて、産み出したる新模様は、

挿畫に示すが如く、手に把るよりも、遠見には如何にも高尚優美にして、至極映りよき模様なり。・・・(『風俗画報』第 174 号) (下線部筆者)

「夜會模様」

三井が此の點にまで注目するは、我國衣裳模様の進歩したる著るしき現象にして、又貴族貴婦人間の交際場裡に限りなき便益を興へたるものといふべし。夜間電氣と瓦斯との光線を受けて色合の變色するは、誰もかも熟知せる所なるが就中紫、鶯茶、海老茶、草色の如きは、殊に驚くべき變色を來すを見る。是に於てか、夜會用として尤も適當なる衣裳を、考案すこそ、今日の急務なるを認めむ。又假令夜間にのみ用ゐらるべき衣裳なればとて、染模様の配合、白晝見ては如何にもみともなげなる模様も、決して望ましからねばとて、都合好き色をのみ取合せつ日夜苦心の末、さまざまに意匠を凝らし、染め上りたる新模様は、挿畫に示す「夜會模様」なり就て見らるべし。(『風俗画報』第 174 号) (下線部筆者)

「衣裳の模様 大型の模様」

園遊會及び夜會模様の、時世に適合して、喧傳せらるゝや、趨勢端睨すべからざるまでに、流行の高潮を占めたり、大輪の菊、牡丹、扇面流がし、源氏貝、雪持の梅等、いづれも模様の大形にして、斬新なるを好めるは、今日の狀態なり、さればよ、令嬢、令閨の衣裳や、昨年と比較するに、單に模様の大なるのみならず、交際場裡に出入する人は、一般に新模様、新工夫を好めるの傾向あり。(『風俗画報』第 201 号)

(下線部筆者)

上記記述より、夜會や園遊會といった機会は、遠くから見ても美しく、見栄えのする大柄な模様や、日中でも夜間の街灯下でも映える色合い等、女性たちのそれまでの意匠にはなかった新たな要件を求める傾向が表れていたといえる。また、「交際場裡に出入りする人は、一般に新模様、新工夫を好めるの傾向あり」という記述が見られるように、交際の場合へ出入りする女性たちの着物の意匠には、常に新しく、工夫が求められていたといえる。このような新しい意匠の工夫の例は、『風俗画報』第 387 号(明治 41(1908)年 8 月 5 日刊行)、第 391 号(明治 41(1908)年 12 月 5 日刊行)に掲載された記事においても見ることができる。

「新流行の鱗粉模様」

最近貴婦人社會に行はるゝ鱗粉模様なるべし。鱗粉模様とは、東京名和昆蟲研究所の發案にかゝり、染めたるにもあらず、畫きたるにもあらず、美麗なる胡蝶の翅扮を同研究所多年の苦心に依りて成れる一種の器械を以て、其儘衣服の材料たる、絹、絹等に轉寫するものにして、・・・光炯々たる電燈の下には、特に一種言ふ可らざる美麗の光彩を放つを以て、夜會服には極めて適當のものと・・・(『風俗画報』第 387 号) (下線部筆者)

「鱗粉模様」

鱗粉がきらゝ、光つて、夜會宴會等の燈下の服裝には一種獨特の長所を有して居るので帶地、半襟などには相當に應用されて居る外、裾模様、リボン、ハンケチ、ネックイ、紙入、繪葉書、下駄の鼻緒、傘、漆器、陶器等にまでも應用されて居る様である。(『風俗画報』391 号) (下線部筆者)

この時代においては、もはや呉服業界に留ま

らず、新たな工夫を求め、業種を問わず様々な試みが積極的になされていたと推測できる。そのため、雑誌等で紹介されているものの中には、広く一般の流行にはならなかったものもあったと思われるが、女性たちがそれだけ意匠に求めるものが高かったことが窺える。残念ながらこの時代に出現しながら後に消えてしまった意匠も多くあると思われる。しかし、このような新しい試みは、次の時代（大正時代）の現存作品から類推すると、色と模様の特徴は、次のように発展していったことがわかる。まず、色の点においては、明治時代後期から大正期にかけて更に艶やかにも淡白にも表現できる段階にまで至り、油絵的な表現をも可能にした。また、模様の点においては、アール・ヌーヴォー、それに続くアール・デコ<sup>13)</sup>やアルピン模様<sup>14)</sup>に代表されるような、これまでにない自由な題材をより取り入れることにつながったといえる。

#### 4. 総 括

以上、明治時代の着物の変化は、明治初年から 20 年代の前期と明治 30 年代から 40 年代の後期の 2 つに大別できた。

まず、明治時代前期における着物は、該当時期に刊行された資料がないことから、教訓書や江戸時代後期、及び明治時代中期頃の資料をもとに検討を行った。その結果、明治時代前期における着物は、地色、構図、模様の大きさの点において、江戸時代からの流れを大いに汲むものであり、江戸時代の美意識や価値観が色濃く残っている時代であることが明らかとなった。

次に、明治時代後期における着物は、色と模様の点から前期で捉えられた美意識や価値観とは異なる基準で動いていたことが捉えられた。まず、色については、化学染料の普及によって、色の濃淡や明暗を利用した意匠が見られるようになった。曙染めは前期にも見られるものであるが、後期のそれとは全く異なり、後期の曙染めは、鮮やかさの点において大きく異なってい

た。また、色の流行についても、それまでは色相の変化であったといえるが、明治 40 年代になると色の濃さ（彩度）によって色の流行が決められるようになるなど色の使われ方が変わった。

模様については、江戸時代後期から明治時代前期に主流であった繊細かつ精巧なものから、大柄で大胆な模様へと変わっていくことが捉えられた。また、模様の種類についても、洋花模様、日本の歴史を遡った模様など、それまでに見られなかった新しい題材が取り込まれるようになっていった。

このような後期からの意匠変遷の変化の背景として、女性たちが園遊会や夜会といった社交の場に出て、見られる機会が増えたことを指摘した。西洋人との交際や、夜の街灯下を歩くことなど、それまでにない経験は、それ以前の着物になかった要件を必要とするようになった。それは、遠くからも目立ち、西洋人と並んでも劣らない、大きな模様であったり、昼夜問わず見栄えのする色合といったものであった。もちろん、後期において、このような着物への工夫は先述した通り、他にも様々なされていたであろう。そして、当然のことながら、これらを実現するために化学染料の導入を始め、新技術の発達が変化を進めていたことはいうまでもない。しかしながら、そこには新たなものを追い求める作り手や着用者である女性の存在がなければ発展していかなかったといえる。

以上、これらを踏まえ、改めて明治時代における着物の流行変遷をまとめると、明治時代の着物は、前時代である「近世」の流れを汲んだ消極的な時代と、「近代」に向かい新たなものを作り出そうとする積極的な時代の 2 つの要素を併せ持っていたと結論づけられる。

#### 5. 今後の課題

幕末から明治時代初期にかけての着物の具体的な様相を知る資料が乏しいため、本研究では、

それ以前の江戸時代後期、それ以後の明治時代前中期の資料を手がかりとして、その様相を推察した。今後は、幕末明治初期に来日したお雇い外国人の関係資料や、当時の新聞等から、当該時期のより詳細な着物の実態を把握する手がかりとしていきたい。

#### 謝辞

本稿をまとめるにあたり、長崎巖教授（共立女子大学家政学部被服学科染織文化研究室）には、終始にわたりご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

#### 註

- 1) 本論文においては江戸時代以前を「小袖」、明治時代以降を「着物」と称する。
- 2) 谷田関次、小池三枝『日本服飾史』、光生館、151-166 頁、1989 年。
- 3) 村井不二子「明治衣服の意匠と色彩（第一報）」『学苑』、第 192 号、62-72 頁、1956 年。  
村井不二子「明治衣服の意匠と色彩（第二報）」『学苑』、第 206 号、54-73 頁、1957 年。  
大竹この「明治時代の服装（二）－女性の着物を中心として－」『学苑』、第 179 号、96-112 頁、1956 年。
- 4) 長崎巖「小袖からきものへ」『日本の美術』、第 435 号、1-98 頁、2002 年。  
長崎巖「－シックでモダンな装いの美 江戸から昭和－ Kimono Beauty』、東京美術、1-304 頁、2013 年。  
山邊知行『京都の近代染織』、京都織物卸商業組合、1-243 頁、1994 年。

- 5) 本研究では、明治 22 (1889) 年 2 月～大正 5 (1916) 年 3 月まで刊行された『風俗画報』を主な資料として扱う。
- 6) 筆者「平成 23 年度修士論文 江戸時代の小袖における「後室模様」の実態とその存在意義に関する研究」、144-145 頁、2012 年。
- 7) 石川松太郎『女大学集』、平凡社、50 頁、1977 年。
- 8) 石川、前掲書、165 頁。
- 9) 4) に同じ
- 10) 版本形式の雛形本は、江戸時代後期に肉筆雛形本に取って代わられるが、明治 20 年代後半頃から再び刊行されるようになる。
- 11) 4) に同じ
- 12) 宙花「三井の花見衣」『新小説』、春陽堂、236 頁、1902 年。  
昭和女子大学被服学研究室『近代日本服装史』、近代文化研究所、180 頁、1976 年。
- 13) アール・ヌーヴォー（植物や昆虫といった自然界の生き物をモチーフとし、曲線が特徴的な意匠）に次いで、ヨーロッパで起こった装飾様式。直線的・幾何学的なデザインが特徴である。
- 14) 大正時代に入り、西洋への憧れと親しみが広く一般に広まっていったことで登場した模様。このような山岳風景は当時日本人に人気があったスイスを連想させることからこの名がついた。  
参考：長崎巖「－シックでモダンな装いの美 江戸から昭和－ Kimono Beauty』、東京美術、198 頁、2013 年



図 1. 鼠縮緬地風景模様着物  
(明治時代前期)



図 2. 『古代模様廣益紋帳大全 下巻』  
(明治 24 (1891) 年刊行)



図 3. 『新模様雛形本』  
(文政 3 (1803) 年刊行)



図 4. 黒平絹地柴垣雪輪枝垂桜模様着物  
(明治時代前期)





図5. 藤紫縮緬地風景模様振袖  
(明治時代後期)



図6. 『花のかげ 式』  
(明治33(1900)年刊行)



図7. 濃鼠縮緬地松川菱源氏模様振袖  
(明治時代後期)



図 8. 縹縮緬地朽葉模様着物  
(明治時代後期)



図 9. 『きぬくらべ』  
(明治 40 (1907) 年刊行)



図 10. 濃鼠斜子地松竹梅模様振袖  
(明治時代後期)



図 11. 『花のかけ 五』  
(明治 33 (1900) 年刊行)